

文春新書

003

史実を歩く

吉村 昭



文藝春秋

吉村 昭 (よしむら あきら)

昭和2年、東京生まれ。学習院大学中退。昭和41年、「星への旅」で太宰治賞、48年、一連のドキュメント作品により菊池寛賞、54年、「ふおん・しいほととの娘」で吉川英治文学賞、60年、「冷い夏、熱い夏」で毎日芸術賞、「破獄」で読売文学賞、芸術選奨文部大臣賞、62年、芸術院賞、平成6年、「天狗争乱」で大佛次郎賞を受賞。芸術院会員。

文春新書

003

しじつ ある
史実を歩く

平成10年10月20日 第1刷発行

著 者 吉 村 昭

発 行 者 白 川 浩 司

発 行 所 巖 文 藝 春 秋

〒102-8008 東京都千代田区紀尾井町3-23

電話 (03) 3265-1211 (代表)

印 刷 所 理 想 社

付物印刷 大 日 本 印 刷

製 本 所 大 口 製 本

定価はカバーに表示してあります。

万一、落丁・乱丁の場合は送料小社負担でお取替え致します。

©Yoshimura Akira 1998 Printed in Japan

ISBN4-16-660003-6

史実を歩く

吉村 昭

文春新書

003

史実を歩く／目次

「破獄」の史実調査 7

高野長英の逃亡 39

日本最初の英語教師 61

「桜田門外ノ変」余話 75

ロシア皇太子と刺青いれずみ 107

生麦事件の調査

129

原稿用紙を焼く

161

創作雑話

177

読者からの手紙

197

「破獄」の史実調査

二十数年前、青森県の県内紙「東奥日報」主催の講演会の講師を依頼されて、青森市に行った。講演を終え、新聞社の方たちと料理屋で会食した。その催しの担当責任者は、五十代後半の記者であった。

いかにも老練な記者といった感じの方で、言葉の端々に県内のことに精通しているのがうかがえた。私の小説もよく読んで下さっていて、

「珍しい経験をされている方が市内におられるのですがね。お会いして話をきいてみる気はありませんか」

と、言った。

むろん、かれは、小説の恰好の素材になるのではないかと考え、そんなことを口にしたのだ。その日はじめて会った記者だが、私はかれが物事を冷静に見る眼を持っているのを感じていたので、その好意に応じようと思った。会ってみたい、と私が答えると、かれは立って電話をかけに行った。もどってきたかれは、目的の人が事務所にいて、会ってもよいと言っていると私に告げた。

私は、かれと料理屋を出て夜道を歩いていった。雪をふんで行ったことを記憶しているから、冬であった。

かれの後から木造の建物の二階にあがると、部屋の奥に置かれた大きな机の前に坐って帳簿を繰っている人がいた。福士重太郎氏で、公的な金融機関の要職にあった。

ストーブの傍らに置かれた椅子に、氏と向い合って坐った。

氏の珍しい経験とは、昭和十年に青森県警察部刑事課長に着任してから間もなく遭遇した出来事であった。

準強盗致死事件が未解決になっているのを知った氏は、鋭意その事件の捜査に力を注ぎ、やがてSという男を犯人として割り出し、共犯者とともに逮捕した。

Sと共犯者は青森刑務所柳町支所に拘留され、裁判でSは死刑、共犯者は懲役十五年を求刑

された。

これで事件は一段落したのだが、それから間もない日の早朝に、警察署から福士氏の官舎にSが柳町支所から脱獄したという電話が入り、氏は支所に急いだ。

「獄房の中を見ますとね。掛けぶとんの下に箒やバケツ、雑巾が突っこんであって、まるでSが寝ているようにしてあったのです」

独居房の鉄格子の扉を調べてみると、錠を合鍵であけたらしく、自由に開閉できるようになっていた。

氏は、署員を総動員して第一級の非常線を張り、懸命の搜索の結果、二日後に山間部の共同墓地にひそんでいたSを逮捕した。

合鍵をどのようにして作ったのか、とSを訊問した。

Sは、入浴時に手桶にはめられていた金属製のたがをひそかにはずして、房内に持ち帰りかくした。ついで、入浴して房にもどる時、湯でふやかした掌を錠の鍵穴に強く押しつけて型をとり、さらに入浴中、臀部を洗うふりをよそおって、たがをコンクリートの床で摩擦し、合鍵を作ったという。

Sは、裁判所で無期懲役の判決を受け、服役した。

「その後が問題なんです。Sは、それから収容された秋田、網走、札幌の各刑務所をことごとく脱獄しているんです。合計四回です。当然、各刑務所では脱獄を絶対にさせてはならぬとして頑丈な独房に入れ、さらに特製の大きく重い手錠、足錠をはめさせたのです。そして、看守が二十四時間嚴重に監視にあたったのですが、それでも脱獄を繰返したのです。その方法をききましたかね、智恵のかぎりをつくした巧妙なもので……。頭がいい男なんですな」

富士氏は、感嘆した。

Sは最近仮釈放になったときいている、と氏は言った。

「その男に会ってみたいと思いますか」

私はずねると、

「とんでもない。脱獄したときいた時の驚きとつかまえるまでの心労は、今でも忘れません。顔も見たくありませんよ」

と言つて、氏は笑つた。

帰京した私は、小説の素材を書きつけておくメモに「脱獄王」と記した。

それは、たしかにショッキングな話であった。富士氏は、ふやけた掌を鍵穴に強く押しつけたと言いながら、その仕種を試してみせたが、その情景が眼に焼きついてはなれなかった。

その後、私は、筑摩書房刊の文芸誌「文芸展望」に「赤い人」という長篇小説を書いた。それは、明治初期に北海道の石狩川上流の密林中に建設された、日本最大の刑務所というべき樺戸集治監を素材にした小説であった。

北海道開発を企てた明治政府は、その集治監に送り込んだ囚人の労働力を道路、港湾、鉄道等の建設に注ぎ、それは大きな成果をあげた。私は、北海道の開発がそれら囚人によって成ったことを知り、その小説を書いたのである。囚人が赤い囚衣を着せられていたことから、「赤い人」と題した。

むろん、その小説の資料収集その他で行刑関係者の協力を得、そうした方々との接触によって知己も増した。それによって、受刑者、刑務官を主人公とした短篇小説をいくつか書いた。その方たちと会っている折にSの話が出るが多く、Sが行刑関係者の間できわめて特異な伝説的人物となっているのを感じた。仮釈放された後、Sは日雇い労働者として働いているということをお口にしている人もいた。

私は、黙ってきいていた。Sが存命しているかぎり、かれを主人公にした小説を書く気持などなかった。Sにとって、過去に四回脱獄したということは人に知られたくない事柄にちがひなく、かれのプライバシーを尊重するのが、市民の一人である私の義務と考えていた。

北海道内の刑務所を統轄する管区長の任にあった佐藤晴夫氏とは、「赤い人」の調査でお世話になったが、退官して大学教授となっておられた氏から、

「Sは死にましたよ、心臓病で……」

と、告げられた。かなりの高齢だったという。

「そうですね、亡くなりましたか」

私は、うなずいた。

それから三年後、私は、岩波書店刊の総合誌「世界」の編集部から連載小説の依頼を受けた。なにを書くか苦慮し、編集部員に会って三つの素材を口にした。その一つはSの話で、編集部員はぜひそれを書いて欲しい、と言った。

私は承諾したものの、気分は甚だ重かった。

行刑史上類のない四回の脱獄をしたSの生き方は、余りにも劇的で、それを書いても興味本位の小説にしかないような気がした。小説は人間性の内奥を書くものであり、また社会を見つめるものであると考えている私は、安直な読物になる恐れのある小説は書きたくなかった。

私は、編集部に一カ月間締切日の延引を申出て、基礎資料を読むことにとめた。

連日、資料を読んで過すうちに、私の内部に書いてみたいという気持が日増しにのつた。

Sの四回にわたる脱獄のうち三回は終戦前で、一回は終戦後である。つまり終戦をはさんで脱獄を繰返したわけだが、それらの脱獄を書くことは、そのまま戦時と終戦後の異様な社会相を描くことにつながる。

戦時の刑務所、刑務官、受刑者については「戦時行刑実録」（矯正協会刊）という分厚い記録書があるが、それによると食糧が枯渇していたのに刑務所では受刑者に規定通りの量と質の食物を給与することに全力を傾けた。それに対して刑務官たちは、乏しい配給の食糧を口にするだけで、飢えにさらされていたという奇妙な現象がうまれている。

さらに終戦後には、進駐してきた米軍の刑務所への強圧的な介入があり、それは敗戦国日本の縮図ともなっている。

また私は、Sと刑務官たちとの関係がきわめて奇異なものであったことも感じた。Sは手錠、足錠をはめられて独居房に拘禁され、刑務官たちは、鉄格子の外から昼夜をわかつた監視の眼を注いでいる。

しかし、私は、記録を読んでいるうちに監視しているのはSの方であり、逆に刑務官たちが監視される立場に立たされていたのを感じた。しかも、Sは自由に寝起きしているのに、刑務官たちは昼夜の別なく立って鉄格子の中に視線を据えていなければならない。精神、肉体の負

担は、刑務官たちの方がはるかに大きかった。

私は、動物園の飼育係の人が口にした話を思い起した。外国からオランウータンが箱に入れられて動物園に運び込まれ、飼育係は丸くうがたれた孔から中をのぞき込んだ。ところが、そこにはオランウータンの眼があつて、オランウータンが外をうかがい見ていたという。

それと同じように、Sは脱獄の機をうかがつて獄房外を注視していたのである。

私は、終戦前後の時代性、Sと刑務官との奇怪な人間関係に、これは小説に書くべきだ、と執筆の決意をかためた。

私は、初めてSの話をしてくれた福士重太郎氏に再び会いたいと思ひ、その所在を探った。氏は百貨店の会長の任にあつて、連絡をとることができ、青森市におもむいた。

私は、立派な会長室に通された。氏は七十九歳とは思えぬほど若々しかった。

Sについて私はあらためて問ひ、氏は記録に眼を通しながらSの逮捕、青森刑務所柳町支所からの脱獄、逮捕後の宮城刑務所への移監について詳細に話して下さり、私はそれを録音テープにおさめ、メモをとつた。

ついで私は、東奥日報社に行き、Sに関する新聞記事をコピーしてもらつた。大事件として扱われていて、記事は大きく、連日にわたつて掲載されていた。

Sは、宮城刑務所から東京の小菅刑務所に移送された。昭和十五年四月である。

昭和十六年に入ると日米関係が悪化し、九月には日米開戦は避けられないという情勢になった。

戦争がはじまって東京が空襲にさらされた折には、刑務所が破壊されて囚人の暴動、集団逃走の発生が予想される。そのため司法省は、小菅刑務所に収容されていた無期、長期刑囚二百名を施設の整った秋田刑務所に十回に分けて移送し、Sも護送された。

十二月八日、日米戦争が起った。

翌年六月十六日の夜明け前、Sはこの刑務所から脱獄している。

私は秋田市に行き、Sが脱獄した頃、秋田刑務所でSを監視していた元刑務官のY氏を訪れた。

Sは反抗的な態度をとって規則違反をかさねたので、独居房から違反者を閉じこめる鎮静房に移された。

記録その他によると、Sは鎮静房の壁をイモリのように伝って高い天井の明り窓から脱け出たとされている。私は、Y氏にSのこと、脱獄時のこと、鎮静房のことをたずねた。

Y氏は、私の問いに鎮静房の図を描いて、説明してくれた。外壁が煉瓦作りで、内部は一坪